

たけの子 誕生物語③



東日本大震災による原発事故はわたし達が安心して野外保育を行う環境を奪ってしまいました。

当時のスタッフ5人は、在園児それぞれのご家庭が避難していたため保育はできなかったものの、度々集まり、当時限られていた放射能についての知識を交換しました。

福島県は福島県放射線健康リスク管理アドバイザーとして、当時長崎大学の山下俊一医学博士（現日本甲状腺学会理事長・WHO緊急被ばく医療研究協力センター長）と同じく当時長崎大学の高村昇医学博士を任命し、県内各地で講演を行いました。山下氏の「ニコニコする人には放射能は来ない。クヨクヨしていると放射能が来る。これは明確な動物実験でわかっています」（2011年3月21日 福島テルサ）という発言は、わたし達福島県民にあまりにも大きな影響を与えました。

加えて、福島市市政だよりの4月号で二人は市民の質問に答える形で「1時間当たりの空間線量が10マイクロシーベルト以下であれば、外で遊ばせて大丈夫です。」と明言したのです。

このことは当時インターネット普及率が30%という福島において、紙媒体でしか情報を取れない世代とインターネットニュースから様々な情報が取れる子育て世代との深刻な分断を助長したのは確かです。そして、福島では、親子、夫婦、そして友人がそれぞれ

の判断で、福島に留まり、あるいは避難・移住し、週末だけでも保養にでるという選択をしました。わたしにとって、人と話しをする時に「この人は放射能についてどう思っているのだろうか」という構えがひとつ入るようになっていったことは、人間関係を構築する時に息苦しいことでした。

そんな中、「子どもたちを放射能から守る福島ネットワーク」（子ども福島ネット）が2011年5月30日に立ち上がり、わたしも創立当初からのメンバーとして加わりました。原発が10基もある福島で、わたしは原発についてほとんど何も知らなかったのが当時の情報共有班というところに所属し、なぜかリーダーに押し出されてしまいました。

政府や福島県が言っていることと、わたし達が知っていることはあまりにも違うことから、わたしは行政への不信感を強めていきました。年間被ばく線量が20ミリシーベルトまで健康には問題ないという国と、中部大学の武田邦彦教授などが言っていることはまるで相反していて、母親としての直感として、子どもを守るためにはどうしたらいいのかという行動に繋がっていききました。

そして、当時避難者が多かった山形県米沢市で、子ども達が中途入園できる園がなかなか見つからないという情報を得、それならわたし達が福島からも子どもを連れて、放射線量の少ない米沢市へ移動して保育をしたらいのではないかしら、スタッフやボランティアの協力を得て、2011年10月から片道50キロを毎日通うという選択をしました。場所は、先の子ども福島ネットの当時の事務局をしていた方が廃園になったところを探してくださり、一緒に交渉に行

つてくれました。現在は公益財団法人農村文化研究所となっています。

そこに3年半お世話になったあとで、2015年4月から現在の場所に移りました。それもまた不思議なご縁でした。受け入れてくださった手塚さんには、感謝しかありません。

保育から始まったたけの子ですが、園児募集も兼ねて、一般参加の事業も徐々に増えていきました。自然体験教室、食農体験教室、幼児親子サークル、そして、無料開放の冒険遊び場。助成金の申請も徐々に通るようになり、スタッフへの手当も最低ラインながら確保できるようになっていきました。

現在の場所に移った時、「お母さんたちの今のニーズはなんだろうか」と自分も一時避難を経験し、子どもをたけの子に入園させてくれていた事務局に聞いたところ、「福島から近場に保養所が欲しい」とのことでした。それで、クラウドファンディングに挑戦し、民泊事業を立ち上げました。その後は「安全な食べ物と子どもが安心して遊べる場所が一緒になっていければ」と言う要望に応える形でカフェを開設しました。

日本で広まりを見せた新型コロナウイルス感染症により、2020年末より子どもたちの体温を計測していますが、体温差があることが気になりました。体温が低いということは抵抗力が弱いことを示しているからです。そこで、ちょうど折よく出会ったつぶつぶ（雑穀）料理で給食を開始しました。

これからもきっと、たけの子は変化し続けるのだと思います。その時、子ども達に何が必要なのかを探り続けるかぎり。この続きはまたいつか。